

日経MJ 2019年 1月14日付

ナイトライフ乏しい日本

ブルーノート東京の30年記念イベントに参加した。多くの関係者が集まる楽しいイベントだった。一流の音楽を聴きながら、食事やワインを楽しむ。こうしたライフスタイルはかつての日本にはなかった。その草分け的な存在のブルーノート東京が30周年を迎えたということは、まだ十分ではないにしても、日本でもナイトライフが少しずつ定着し始めたのかもしれない。ナイトライフの存在は、インバウンド(訪日外国人)振興との関連で注目されている。この6年ほどの間、インバウンドの旅行者が大



伊藤元重の

エコノウオッチ

幅が増えたことが、景気にも大きなプラスとなっている。インバウンド旅行者をさらに増やしていくのが政策の目標ともなっている。そうした中、日本はナイトライフが貧弱だ、との声が訪日客の中から上がっているのだ。せっかく日本に来て、夜楽しめるところが少ないという。東京ならそれでも良いレストランもあれば、コンサートなどの催しも少なくない。私などはそう思うのだが、海外の人には物足りないようだ。ましてや地方都市では、夕方以降は街がひっそりとして、旅行者が楽しめる場所

働き方改革の試金石

を探するのは大変だろう。たかがナイトライフと軽視してはいけない。私たちが仕事などで海外に出かけるときも、会議などが終わった夜の会食や観劇などが大きな楽しみとなっている。ニューヨークであれば、ミュージカルなどもある。フランスやスペインなどのラテン系の国では夕食のスタートの時間が遅くなっているが、これも夕食というまとまった時間をじっくり楽しむという意図があるのは明らかだ。台湾でも、夜市が観光の目玉の一つとなっており、台湾旅行して夜市に行かない人は少ないだろう。

海外から来る人の意見は、私たちのライフスタイルを見直すいいきっかけとなる。私たちが気づきにくいことを指摘してくれるのだ。ナイトライフを充実させるということも、単なる観光客受けの手段というより、私たちのライフスタイルの変化の方向を考える起点と考えるべきだ。働き方改革というのは、働いている時間のことだけでなく、仕事から離れた時間帯をどう過ごすというのにも深く関わる。特に仕事を終えた後の夕方以降の時間をどう過ごすのかは、生活を充実させる上で重要な意味を持つはずだ。

内需拡大という観点からナイトライフの持つ意味は大きい。消費の流れがモノからコトにシフトする中で、コトを消費する時間の確保が重要になる。旅行でも、観劇でも、テーマパークでも、コト消費のためには時間を確保することが必要となる。モノのようにまとめて購入できないのが、コト消費の基本である。その意味では、週末と休暇を除けば、まとまった時間を取るために夕方以降の時間帯は貴重な存在なのだ。日本の街をより魅力的にするためにも、私たちの生活を充実させるためにも、そして内需を拡大して景気を刺激するためにも、ナイトライフを充実させるビジネスが広がることを期待したい。(学習院大学国際社会科学部教授)